

1 研究のねらい

本校の児童生徒は、島外の高校へ進学し、多人数の中で学習していくなど、生活の状況が一変する。そのため、育成すべき資質・能力として「未知なる状況に対応する力」に重点をおいて、「主体的・対話的で深い学び」を軸とした指導法改善に組織的に取り組み、「思考力・判断力・表現力を活用する場面」を一単位時間の授業内で確実に設定する共通実践を進めてきた。

その結果、児童生徒の実態に沿った指導法が継続的に検討され、複式授業でのリーダー学習や自己の考えを可視化するための思考ツールの活用など、多くの実践により、NRTや鹿児島学習定着度調査において、思考力・判断力・表現力を問う問題の正答率が向上している。

一方で、本校は、極小規模校のため、児童生徒が多様な意見や考えに触れる機会が不足している。そのため、「対話的で深い学び」の指導法について、研究を積極的に進め、改善を図ることとした。また、児童生徒の学力差があることも課題の一つである。そこで、学力差解消に向けて、ICTを積極的に活用した「個別最適な学び」や、他者との「協働的な学び」を意識した学習指導についての取り組みを考え、実行していくことにした。

2 研究の概要

タブレットを始めとしたICT機器を活用しながら、「個別最適な学び」で、基礎的基本的な力をつけ、「協働的な学び」や「対話的で深い学び」を具現化した学習活動を展開することで、思考力・判断力・表現力を高めることができるであろうという仮説に基づき研究を行う。

3 研究の内容

- (1) 「個別最適な学び」の工夫
- (2) 「協働的な学び」の工夫
- (3) 「対話的で深い学び」のある授業の実践

4 研究の実際

- (1) 「個別最適な学び」の工夫

ア ドリルパーク

学年や教科に応じて、導入や終末などの段階で、それぞれがドリルパークを使い学習の定着を図ることに活用している。一人一人の間違った問題がピックアップして出題されるので、繰り返し取り組むことになり、定着を図ることができる。児童生徒自身がつまずきを確認でき、さらに授業者も児童生徒のつまずきを確認することができる。

イ 朝の活動

毎週火・木の朝の活動である「まなびタイム」の時間に、小学校では復習や振り返りを行い、中学校では生徒に自分の苦手な教科やさらに伸ばしたい教科などを選択させ、児童生徒に取り組みさせている。15分程度の活動であるからこそ、集中した取組ができています。

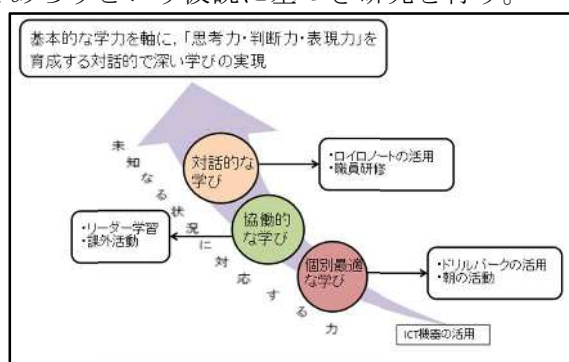
- (2) 「協働的な学び」の工夫

ア リーダー学習

リーダー学習は、学習者が中心となって進めていくものである。大まかな学習の進め方はある程度決まっており、授業のポイントとなる部分に指導者の指示を示してはいるが、その時の学習リーダーが全体を見ながら的確な指示を出したり、両方の学年の直接指導時



【リーダー中心の話し合いの様子】



【研究構想図】

間が重なった場合に指導者の代わりに学習を進めたりするなど、児童の主体的な活動が大きく表れるものがリーダー学習の特徴である。

第6学年の児童は、他の学級よりも人数が多かったこともあり、令和3年度からリーダー学習に取り組ませている。当初は、リーダー学習の手引き（マニュアル）に従った形式的な学習で慣れることに重点を置き、進め方を間違えても、よかったところを称賛し自信をつけさせていった。後半からは、手引きを使わず、学習の流れが書かれたボードと状況を見ながら学習を進めていけるようにリーダーを育成していくことに重点を置いた。このような取組を継続することで、昨年度の第5学年では間接指導時において児童だけで課題を話し合い、それぞれの考えから共通点や違いを見いだす学習活動ができ、主体的な学習が展開できるようになってきた。

イ 課外活動

中学校には新聞部があり、中学生はほとんどの生徒が入部している。活動する際は、部長が中心となり記事内容を考え、記事担当を決めていく。「どうすればより地域の方に楽しんで読んでいただけるか」を視点に、互いに話し合いながら記事を作成している。

記事の内容によっては、インタビューをすることもあるので、その際の質問内容も担当者だけではなく、全員で考えている。インタビューの際にも、メインインタビュアー以外の生徒も質問の回答からさらに話を掘り下げて質問していくようにしている。担当の記事が書き終わったら、他の部員に記事を見せ、推敲を重ねていくようにしている。

このように記事担当は決まっても、全員で協力し合いながら新聞記事を作成している。

(3) 「対話的で深い学び」のある授業

ア 職員研修

研究授業や授業研究などの際にもロイロノートを活用し、写真や動画で児童生徒の様子や板書、ノートを撮影し、授業研究の際にそれを共有し、思考ツールで意見をまとめた。「対話的で深い学び」のある授業づくりのために、全職員が授業について意見を出し合った。

ロイロノートを職員研修で活用することで、全職員が使い方や実践例を知り、「対話的で深い学び」のある授業づくりへのツールの一つとして抵抗感を少しでもなくすことにも繋がった。

イ ロイロノート

学習の中で、話し合い活動を深めるための手立てとして、特に小学校ではロイロノートを活用した学習に取り組んでいる。互いの考えを視覚的にもとらえやすく、疑問や自分で気が付かなかった部分にも触れることで、その後の話し合い活動での深まりにつながっている。また、シンキングツールを使うことにより、考えを整理し深め、積み重ねることができるため、自分自身の対話としても効果的に使うことができ、授業者も変容をつかみやすい。

5 研究のまとめ

(1) 成果

ICT 機器等を活用し、児童生徒が自ら学習に取り組む姿勢ができてきた。またリーダー学習が確立してきていることで、児童生徒が主体となった授業づくりができてきている。

ICT 機器をツールとして話し合いやまとめを進めることで、学習の積み上げがされてきている。

(2) 課題

一人学級については、対話的な活動が難しい状況にあるので、過去の児童生徒の学習との比較や他校の児童生徒との活動を取り入れていく必要がある。

6 今後の取組

今後も児童生徒の基本的な学力をつけていくために、「個別最適な学び」の充実を図り、主体性を高めていく。また、「対話的で深い学び」を実現するために、話し合い活動を充実させるだけでなく、児童生徒の活動の様子や作品を蓄積していき、比較し考えを深めさせていけるようにしていく。